

出版社の依頼で一般向け講演会で講師を務めた。私の専門は数学である。演題は「素数はどれだけたくさんあるか」。過去150年にわたり解決していない数学最大の謎、「リーマン予想」の話である。はたしてこんな話題に聴衆は集まるのだろうか。そんな疑問を抱きながら当日を迎えた。

だが会場はほぼ満員。私のような40代、50代の男性が多かった。いったいどんな人たちだろう。終了後の懇親会で聞いたところ、高校の数学教師が2割ほど。ほかは多くが工学や化学系メーカーなど企業に勤めながら余暇に好きな数学を楽しんでいるとのことだった。印象的だったのは、どの人も目は生き生きとし実に楽しそうに自分と数学の関わりを語っていたことだ。

数学研究を生業としない一般の人が数学を楽しみ、最先端まで追究する。多額の旅費と受講料、時間と労力を費やし何十人もが講演を聴きに来る。主催者によると、この数

意熱と知性の人に市井の数学講演会にぎわう

学講演会は毎回盛況らしい。こんなことが起こる国は私の知る限り日本だけだ。私がかつて住んでいた米国や英国も、大学に勤務した韓国でも、全く考えられない。

なぜか。理由はいくつか考えられる。日本にはもともと和算の伝統があり、日本人は欧米より数学好きといわれるのもその1つかもしいない。

だが最大の理由は中年世代の学力水準が高く、学問に興味を持って楽しむだけの余裕があること。そしてそれを生かす出版文化が日本に根付いていることだろう。日本には素人向けながら最先端まで解説する数学の雑誌や書籍が少なからず存在する。これは海外ではまずない。欧米の研究者や韓国の学生にこの話をすると、皆その違いに驚く。

国力というと政治や経済、最先端の科学技術にばかり目が行きがちだ。しかしこの日は、会場を埋め尽くした一人ひとりの知性と熱意から日本の力を感じることができた。